5.悪性腫瘍・病理

[P05-10]Spontaneous regression of plasmablastic lymphoma; 2 cases report

○Sawako Ono[1], Yasuharu Sato[2], Takuro Igawa[3], Ikeda Tomoka[3], Hiroyuki Yanai[1], Hitoshi Nagatsuka[4], Tadashi Yoshino[3,1] (1.The Department of Pathology, Okayama University Hospital, Okayama, Japan, 2.Okayama University Graduate School of Health Sciences, Okayama, Japan, 3.The Department of Pathology, Graduate School of Medicine, Dentistry and Pharmaceutical Sciences, Okayama University, Okayama, Japan, 4.The Department of Oral Pathology and Medicine, Graduate School of Medicine, Dentistry and Pharmaceutical Sciences, Okayama University, Okayama, Japan)

ポスターを表示

【症例1】80代、男性。右側上顎に外向性発育を示す腫瘤を自覚し、受診した。腫瘤は歯槽骨に限局しており CT、 PET-CTでは転移を認めなかった。血液検査では LDH、 sIL-2Rは基準値内、 HIVは陰性であった。右上顎歯肉から生検が施行され、組織学的に大型で異型の強い lymphoid cellsが単調に増殖してした。免疫染色では CD20陰性、 CD3陰性、 CD138陽性、 Ki-67標識率は高率に陽性を示した。 In situ hybridization(ISH)では EBER陽性で、 plasmablastic lymphomaと診断された。生検後から腫瘍は縮小傾向となり、上顎骨部分切除術が行われるも腫瘍の残存を認めなかった。【症例2】60代、男性。下顎歯肉に1cm大の腫瘤を認め、受診した。 エプーリスが疑われ、切除術が施行された。組織学的に上皮下結合組織に大型で異型を示す lymphoid cellsの単調な増殖がみられた。免疫染色で CD20陰性、 CD3 陰性、 CD138陽性、 Ki-67標識率は高率に陽性を示した。 ISHでは EBER陽性であり、以上の所見より plasmablastic lymphomaと診断された。切除術後、追加治療は行われず経過観察されているが、再発はみられていない。 Plasmablastic lymphomaと診断し自然消退し得た症例報告は少数であり、臨床病理学的な特徴について文献的考察を加えて報告する。

©Japanese Society of Oral Oncology